

Title	『遅れてくる了解』大貫隆先生講演会
Author(s)	堺, 正貴
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.22-No.3, 2013.3 : 12-13
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4492
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archive

『遅れてくる了解』 大貫 隆先生講演会

2012年11月27日（火）、聖学院大学ヴェリタス館教授会室において、臨床死生学研究講演会が開催された。講師として大貫隆先生（私立自由学園最高学部長、東京大学名誉教授）をお招きし、『遅れてくる了解』と題してご講演をいただいた。会場には43名の方が集まった。講演会は、阿久戸光晴先生（聖学院大学学長）による、大貫先生に敬意を表される挨拶から始まった。そして司会を務められた平山正実先生（聖学院大学大学院教授）からの、大貫先生についてのご紹介が続いた。

大貫先生の講演のタイトル、『遅れてくる了解』には、大貫先生自身が、今になって、あらためて得心がいった、という先生ご自身の深い感慨が込められたものであることが語られた。新約聖書の学の泰斗であり、キリスト教徒である大貫先生にして、キリスト教の説く死者の復活の意味が、今さらながら了解された、という意味がこのタイトルには込められている。

この「了解」は東日本大震災の経験によってもたらされたという。津波でさらわれた数千もの遺体が海浜に打ち上げられていたというニュースを聞き、浜に連なり重なる無数の遺体のイメージが臉に浮かんだとき、どうしようもない無念さとかやささが心の底から湧きあがってきた。そのとき、どうしても、体の甦り、死後の復活がなければならぬと、感じざるを得なかったと大貫先生はいうのである。大貫先生は、イエス・キリストの説いた死者の復活とはどのようなものであったのかを、聖書のうちのりに従って明確にするために、自らのご著書である『イエスという経験』に沿って、お話を展開される。

そこではイエスは、「完全な神であり、完全な人」とであると信仰されている存在ではなく、処刑されるにいたった歴史上の人物として描かれている。その実在した人物が何を語り、何を信じていたか、という立場で、イエスによる復活信仰が解き明かされていくのである。

イエスによれば、「神の宴」がすでに始まってい



自由学園最高学部長 大貫隆先生

て、これから、今、生きて死んでゆく者だけではなく、すでに遠い過去に死んだ者まで含めて、死者の復活が始まっている。この復活信仰によって語られているのは、過去の死者たちにも未来がある、ということだと大貫先生は強調する。この復活の宴には、ユダヤ教だけではなく、すべての異教徒たちも招かれている。そして天上で始まっている神の国は、間もなく地上にも「力にあふれて」現れることが説かれている。さらに、アブラハム、イサク、ヤコブは、これからの甦る死者たちとも宴をともしるため天上で待っているという。この記述は過去に甦った死者たちが、すでに未来にあって、これから宴に参加する人々を待っていることを意味する。このことから、イエスは、過去、現在、未来が一つになって満ちている「全時的な今」を生きていて、それを宣べ伝えていたと大貫先生はいう。

この死者の復活と神の国を説いたイエスが十字架において処刑されたとき、このままで終わってはいけないのだという弟子たちの悲痛の思いがあったはずである。イエスの死という悲劇が残した「未決の問い」、「謎」に答えようとして、イエスが天で復活しているということを信じなければ、この出来事の解決はもたらされなれないと思いつた弟子たちの慟哭の中から、復活信仰を持った原始キリスト教団が形成されたと、大貫先生は推測す

る。つまり、大貫先生はキリストの復活を実際に弟子たちが目撃した所から、キリスト教の形成が始まったとは見ていない。

しかし、この弟子たちの喪失の痛苦に、大貫先生は東日本大震災の際に感じた自らの無念さを重ね合わせる。数千もの死体が浜に打ち上げられたと聞いたとき、これで終わりか？この人たちはこれで終わってしまうのだろうか？という切実な思いが湧出して来る。そして、この人たちには、まだ未来がなければならないという思いまで達したとき、復活信仰の意味の深みを了解できると大貫先生はいう。誰も、この亡くなった人の復活を見ていない。しかしこのような事態に立ち至ったとき、人々はときに願いを込めてそれを信仰せざるを得ない。そのとき、逆にイエスの復活を目撃していないにもかかわらず、弟子たちはその復活を信仰したという立場は、そのような人々の現実と見事に重なり合うことにもなってくるのである。

イエスの十字架上で死の中で、弟子たちが神に託した思いをそのままパラフレーズするかのよう、震災での悲惨事の中で、神に託した思いを大貫先生は次のように表現される。「神は津波で流された者たちと一緒にいた。地震と津波は神自身にまで達した」。そしてこの震災後、キリスト教が語りうるメッセージは、「死人たちには未来がある」のみではないか、と語る。つまり、イエス・キリストが私たちの罪を贖って死んだという贖罪信仰

は、平時の際の、個々人の信仰として意味を持つこともあるかも知れないが、危機の際、特に大勢の人々が危機にさらされている際には、意味を持たないのではないかと疑義を呈する。

大貫先生は、自らの主張が、数十年前に著わされたモルトマンの『十字架につけられた神』の中で既に述べられていたことを思いもかけず発見し、そのことの喜びを表現する。モルトマンは、キリストの十字架と復活こそ、十字架自身がその象徴である「不可解な死の謎」に対する唯一の解答であり、その死に意味をもたらした点と贖罪信仰は内的関連が見いだせない結論付けている。そして数十年を経て、時代も環境も異なる学者が、まったく独立に同じ結論に達するということが、そうしたことが繰り返し起こることが、自然科学のように実験で事実を証明できない人文科学において、その結論の真実性の証になるのではないかと、大貫先生はモルトマンの学説と自らの学説の偶然の一致という事象から、思いを馳せるのである。そして、「皆様の聖書についての学びが遅れてくる経験と発見に恵まれて良いものとなりますように」という言葉で、講演を結ばれた。その後質疑応答が活発になされ、熱気をもって講演は無事終了したのであった。

(さかいまさたか 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化科学研究科博士後期課程)

